ROTARY WEEKLY

HIROSHIMA KUKO ROTARY CLUB WEEKLY

広島空港ロータリークラブ週報

Be a gift to the world
世界へのプレゼントになろう

会長　鶴田幸彦 / 副会長　乗越耕司 / 幹事　橋濱智美 / ＳＡＡ　河井一朗

2016 年 4 月 6 日発行

事務所　〒729-0417　三原市本郷南 6 丁目 3-26 番地　三原臨空商工会内 2F

TEL 0848-86-0986・FAX 0848-86-0992・E-mail h. kukorc@vega. ocn. ne. jp・http://hiroshima-kuko-rotary. jp/

例会場　〒729-0416　三原市本郷町善入寺 64-25　広島エアポートホテル　TEL 0848-60-8111　FAX 0848-86-9222

APL 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

IM　例会　例会　休会　クリーンキャンペーン　例会

２０１６年４月２日　インターシティーミーティング　記録

ホストクラブ　竹原ロータリークラブ　　開催場所　大広苑

第一部　全体会議

13:20～13:50　開会式

司会進行	竹原ＲＣ　ＳＡＡ	宮本和彦
点鐘	Ｇ９ガバナー補佐	市川重雄
国歌斉唱「君が代」		
ロータリーソング「奉仕の理想」		
開会の言葉	実行委員長	中川康子
歓迎の言葉	竹原ＲＣ会長	久藤孝仁
ガバナー紹介	G9ガバナー補佐	市川重雄
来賓紹介	G9ガバナー補佐	市川重雄
参加クラブ紹介	竹原ＲＣ　ＳＡＡ	宮本和彦
ガバナー挨拶	第2710地区ガバナー	東　良輝
ガバナー補佐挨拶	G9ガバナー補佐	市川重雄
お知らせ		

第二部　基調講演

14:00～15:00

演題　『ロータリーの存在意義と会員基盤の強化』

講　師　大之木　精　二　パストガバナー

第三部　今年度増強活動及び実践報告

15:10～15:50

第四部　記念講演

16:00～17:00

演題　『頼山陽に学ぶ』

講　師　頼山陽研究家　橋本正勝氏

第五部　全体会議

17:10～17:40　閉会式

講評	第2710地区ガバナー	東　良輝
謝辞	G9ガバナー補佐	市川重雄
記念品贈呈	G9ガバナー補佐	市川重雄
次年度Ｇ9ガバナー補佐挨拶	尾道ＲＣ	安保雅文
閉会の言葉	実行副委員長	井上盛文
点鐘	G9ガバナー補佐	市川重雄
お知らせ		

第六部　交流懇親会

17:45～19:20

司会進行	竹原ＲＣ	尾野剛章
開会の言葉	竹原 RC副会長	鴨宮弘宜
乾杯	第2710地区パストガバナー	田村泰三
ロータリーソング「手に手つないで」		
閉会の言葉	竹原RC 次年度会長	菅　義尚
閉会		

御　挨　拶

グループ９　ガバナー補佐　市川　重雄

本日は国際ロータリー第 2710 地区Ｇ9　2015～2016 年度インターシティーミーティングを開催するに当たり公私共にご多用の中ガバナー東良輝様、パストガバナー大之木精二様、田村泰三様、次年度Ｇ9 ガバナー補佐尾道クラブの安保雅文様のご臨席を賜り、またＧ9 各クラブ会員の皆様、多数ご出席頂き開催できます事この上ない感動を覚えております。

さて、今年度東ガバナーの信条でもある「ロータリーの原点に戻り、輝かしい未来の礎を築こう」今年度地域重点項目に、会員基盤の増強を上げておられます。この理念の基、本日は基調講演にパストガバナー大之木精二様に「ロータリーの存在意義と会員基盤の強化」の題材でご講演頂きます。パストガバナー大之木精二様に基調講演講師をお願いしたところお忙しい中快くお受け頂き感謝申し上げます。その後各クラブの今年度の増強活動状況とその成果を発表して頂き今後の会員増強の指針になればと考えております。会員無くしてロータリーの未来は無いものと思います。

続いて記念講演は、地域の特色を出したく熊本県在住の頼山陽研究家橋本正勝様をお迎えして「頼山陽に学ぶ」と題してご講演頂きます。頼山陽先生は竹原は勿論この近隣でも多くの遺跡を残されております。お楽しみ頂けたらと思います。

最後はロータリーのもう一つの目的親睦です。楽しい親睦会になる様に準備させて頂きました。今日一日が皆様にとって有意義で楽しい一時である事を祈念しております。　ホストクラブである竹原ロータリークラブ中川実行委員長をはじめ全会員が結束して本日のインターシティーミーティングが盛会に進行する事を願い準備して頂きました。ロータリーの好意と友情の賜と厚く感謝申し上げ御挨拶とさせて頂きます。

第二部　基調講演

演題「ロータリーの存在意義と会員基盤の強化」

講師　大之木　精二パストガバナー

第三部

今年度増強活動及び実践報告

報告者

広島空港RC　佐々木 正親 会員
因　　島RC　村 上　　光 会員
三　　原RC　夜 船 裕 光 会員
尾　　道RC　宮 地 宏 明 会員
尾 道 東RC　三 宅　　宏 会員
瀬 戸 田RC　耕三寺 孝三 会員
竹　　原RC　本 庄 純 夫 会員

第四部　記念講演

演題「頼山陽に学ぶ」　講師　頼山陽研究家　橋本正勝氏

頼山陽

らい・さんよう――安永9（1780）～天保3（1832）年。大坂生まれ。幼くして父母とともに広島に移る。21歳の時、脱藩を企てた結果、自宅に幽閉・謹慎となるが、その間に『日本外史』の初稿を完成。その後、京にのぼり開塾。『日本外史』『日本政記』『通鑑』は特に有名。詩文、絵画にも優れ、『耶馬渓の図』は大分の土地の名として残るほど。晩年の書斎『山紫水明処』は国定史跡に指定されている。（写真提供＝頼山陽旧跡保存会）

はしもと・まさかつ――昭和21年熊本県生まれ。46年神戸学院大学中退後、防衛庁入庁（その後、通信教育で法政大学卒業）。勤務の傍ら頼山陽の研究と関連する遺品・遺墨の蒐集を行い、退職後は頼山陽の思想を広めるための講演会や遺墨の展示を各地で行っている。平成24年第30回頼山陽記念文化賞を受賞。

幕末維新の志士たちの憧れだった頼山陽

ここに一篇の漢詩があります。

「癸丑歳偶作」
十有三春秋　逝者已如水
天地無終始　人生有生死
安得類古人　千載列青史

「癸丑の歳　偶作」
十有三　春秋
逝く者は　已に水の如し
天地　終始なく
人生　生死あり
安くんぞ　古人に類して
千載　青史に列するを得ん

（十三歳となってこれまでを振り返ると、月日は水の流れのように過ぎ去って二度と戻らない。天地は永遠で始めも終わりも無い。しかし人間には必ず生があり、死がある。それならば何とかして歴史上の偉人のように、自分も日本の歴史上に名を連ねたいものだ）

この漢詩を作った人物こそ頼山陽、当時十三歳。僅か十三歳でこれだけの志を立てた頼山陽は、のちにその存在を一言で説明できないほどスケールの大きな人物に成長します。漢詩文にも優れ、水墨画にも傑作を残し、そして何といっても江戸末期に大ベストセラーとなった歴史書『日本外史』を著して、幕末維新の志士たちに大きな影響を与えました。

私がこの天才・頼山陽と出合ったのは二十歳の時でした。私自身、勤王の志士を好きだったこともあり、学生時代、ふらりと訪ねた頼山陽の遺墨展で遺書ともいえる文章に出合い、強く引かれるものを感じたのです。

此口不能餂殘杯冷炙
此手欲援黔黎之寒餓也

この口は殘杯冷炙を餂う能わざれども、この手は黔黎の寒餓を援わんと欲するなり

（この口は飲み残し酒や冷えた肴さえ満足に食べなかったが、この手は貧しい人たちや飢えに苦しんでいる人たちを救うことを念じて動かしてきた）

これこそが民の上に立つ人間のあるべき姿である。そう思った私は、頼山陽に深く傾倒していくようになりました。

一方で、学生時代の私は小説で身を立てることを夢見ていました。若さゆえの情熱だったのでしょう、面識もないのに武者小路実篤先生のお宅を訪問。何度も足を運ぶうち、私が頼山陽について学んでいることを知ると、先生はこうおっしゃったのです。

「橋本君はそんなに文学の才能があると思えんから、小説家なんかつまらんことはやめて、頼山陽一本でいきなさい」

この言葉で私の人生が決まりました。防衛庁に入庁し、国防の仕事に携わりながら、休日に頼山陽の研究と関係する遺墨・遺品を蒐集。退職後は地元熊本に戻り、さらなる研究と、頼山陽の存在を多くの方々に知っていただくための講演活動を行っています。

頼山陽のことを多くの人は歴史家、思想家といいます。しかし、私は「経世家」と呼ぶのが最も相応しいのではないかと思います。

日本の歴史を以て、世の中を治めていこうという考えで、『日本外史』の他、神武建国より戦国時代までの通史である『日本政記』十六巻、政治全般にわたる意見書である『通議』三巻も手掛けました。この『通議』の内容が伊藤博文や井上馨などの指導者を強く動かし、「明治憲法」のベースとなったことを知る人は少なくなりました。

先の大戦の前までは多くの日本人に尊敬された頼山陽。しかし、戦後ほとんどの日本人に忘れ去られてしまいました。いや、その影響力が大きかったからこそ抹殺されてしまったと言っていいでしょう。

政治も経済も激動の最中にある現代日本にとって、いまこそ頼山陽の存在がクローズアップされるべき時ではないかと感じています。

重罪覚悟で脱藩を試みる

頼山陽を語る上で外せない人物は、何といっても父親の頼春水です。もともと頼家は、毛利元就の第三子である小早川隆景の臣であった惣兵衛が「頼」を名乗るようになり、海運業を営んでいました。

しかし、春水は若い頃から詩文や書に秀で、大坂へ遊学し尾藤二洲や古賀精里らと朱子学の研究を進め、大坂に私塾「青山社」を開きます。そうして山陽は安永九（一七八〇）年大坂に誕生、幼名を久太郎といいました。

翌天明元（一七八一）年、広島藩の学問所創設にあたって春水が儒学者に登用され、一家は広島へ転居します。そうして山陽は春水同様に幼少期からその才を発揮し始めます。『論語』などの四書五経をはじめ、『保元物語』『平治物語』など古今の歴史書や兵書を漢文で読破しました。

しかも、常に「汝、草木と同じく朽ちらんと欲するか」と書いた紙片を書に挟み、読書に飽きるとこれを高らかに朗誦して、自らを鼓舞したといいます。

そうして十三歳の時に先に紹介した「癸丑歳偶作」の漢詩をつくり、江戸在勤だった父・春水に送ったのです。当時の学者の多くは、知識を得ることに汲々として、詩文が読めてつくれるようになれば仕官できると、栄達を求めてあくせくしていました。これを卑しんだ山陽は古の聖賢たちに肖りたいと、徳によって国を治め、世を導く経世家になろうと志したのです。

しかし、青少年期の山陽は病弱で、精神的に不安定な面もありました。寛政九（一七九七）年、十八歳になった山陽は江戸の昌平黌に一年間遊学。そして広島へ戻り、藩医・御園道英の娘淳子と結婚しました。

ところがその翌年、突如脱藩し京都へ走ったのです。当時脱藩の罪は非常に重いものでした。それを知りながらも、広島藩の一学者として終わりたくないという気持ちが彼を突き動かしたのだと思います。春水は藩主に非常に重用された人物でした。二か月後に連れ戻された山陽は、そのおかげで重罪こそ免れたものの、淳子とは離縁、自身も廃嫡、屋敷内に幽閉されることとなりました。

人生を懸けた脱藩に失敗し、廃嫡、幽閉……。まさに逆境ともいうべき出来事を前に、山陽は廃嫡となって自由を得、幽閉によって存分に望む勉強ができると却って喜ぶのです。そして幽閉された三年間で、後の『日本外史』のベースを書き上げてしまいました。

親子二代の志
『日本外史』

『日本外史』は平安末期の源平の争いから徳川十代家治までの治世を、武家の興亡を中心に描いた全二十二巻にも及ぶ大著です。

なぜ山陽はこのような国史を手掛けようと思ったのでしょうか。

当時、日本は三百もの藩に分かれていました。民は「藩こそ我が国」と思い、その頂点に位置するのが徳川家とされてきましたが、山陽はこれに異を唱えるために、『日本外史』を著すのです。

歴史を振り返れば常に武家には興亡がありました。しかしそれでも日本は滅びません。なぜか。それは天皇がいらっしゃるからです。日本という国の中心は将軍ではない、天皇である。このことを山陽は歴史を通して示したのでした。

実は先に天皇を中心とした国史の編纂を志したのは父・春水でした。しかし、春水は広島藩の儒学者です。徳川家の地位を落とすようなことはできません。断念せざるを得なかった春水の志を、山陽が形にしたのでした。

幽閉期にベースができた『日本外史』は約二十年にわたり改訂に次ぐ改訂を重ねます。この間、やはり学者として天下に名をあげたいと願った山陽は、三十二歳の時に再び脱藩同然で京都へと向かいました。詩を書いたり、書家として生計を立て、同時に当時の一流文化人と交流しながら『日本外史』をまとめ上げていきます。

三十九歳の時には十一か月にも及ぶ九州旅行に出発し、田能村竹田や広瀬淡窓などを訪ねます。熊本にも来訪し、山陽の代表作である「天草の洋に泊す」をつくります。ここでは書き下し文でご紹介します。

雲か山か呉か越か
水天髣髴　青一髪
万里舟を泊す　天草の洋
煙は篷窓に横たわり
日漸く没す
瞥見す
大魚の波間に跳るを
太白船に當って
明　月に似たり

山陽の詩文の特徴は何といっても文体の美しさ、そして韻の心地よさです。それが『日本外史』がベストセラーになった理由でもあるでしょう。

例えば『平家物語』では、

「悲しき哉。君の御為に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八万の頂よりなお高き父の恩、忽に忘れんとす。痛ましき哉、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御為にすでに不忠の逆臣となりぬべし。進退これ谷れり」

とあるものを山陽は

「忠ならんと欲すれば則ち孝ならず。孝ならんと欲すれば則ち忠ならず。重盛の進退、ここに窮れり」

と、非常に明快で分かり易く表しています。

そうして文政九（一八二六）年、『日本外史』は完成、これを翌十年に江戸幕府老中の松平定信に献上しています。定信は徳川吉宗の孫にあたり、幕府の中枢の人物でした。その定信に「日本の中心は幕府ではなく天皇である」とする『日本外史』を贈るのですから、大変勇気のいる行いであったと思います。しかし定信が「この書物は中庸を得て穏当であり、正しい理である」と認めたため、山陽はこの本を発刊しても、咎められることはなかったのです。

この一件から松平定信という人物の度量の大きさ、見識の深さを窺い知ることができます。また、定信と山陽の父・春水に深い繋がりがあったことも、この本を手にし、認めた一因であったのではないかと思います。

死期が迫りくる中で
学び続けた山陽

『日本外史』を完成させる頃には、学者、文化人としての評価が高まり、京都では確固たる地位を築きつつありました。さらに江戸への進出を考えていましたが、その身に病魔が忍び寄っていました。

天保元（一八三〇）年頃から体調を崩し、喀血を見るなど容体は悪化の一途を辿りました。自らに死期が迫りつつあることを知り、門人たちの協力を得て『日本政記』『通議』の完成を急ぎました。しかし、その甲斐虚しく天保三（一八三二）年に志半ばで死去。享年五十三歳でした。山陽は最期まで仕事場を離れず、手から筆を離したのは息を引き取る数分前、死に顔には眼鏡がかかったままだったと言われています。十三歳で立てた志を燃やし続け、片時も学ぶことをやめない一生を送りました。

病の不治を悟った時、山陽は門人に肖像画を描かせ、そこに自賛の文をつけました。それが私が感銘を受けた「此口不能餂殘杯冷炙此手欲援黔黎之寒餓也」です。

その時、山陽は門人たちにこの文章を人に見せてはならないと言います。二十年もすれば私の考えを理解する人も出てくるだろうと言って亡くなったといいますが、まるでその後の日本の行く末が見えたかのように、没後二十年にペリーが来航、時代は一気に幕末維新回天へと向かい、その志士たちは山陽の『日本外史』を熱心に読んだのでした。

頼山陽の一生は、まさに今回のテーマである「少年老い易く学成り難し」の言葉どおりの生涯でありました。その向学心の源泉とは何だったのでしょうか。

まず少年期に立てた「安くんぞ古人に類して　千載　青史に列するを得ん」という青雲の志こそが、山陽の一生を貫く信念になったと思います。同時代の中で栄達を求めるのではなく、古の聖賢たちを目指したからこそ、生涯学び続けられたのではないでしょうか。

また脱藩に失敗して幽閉された時、自暴自棄になったりせず、そこでなお自らの求める学問を続けたことが、後の人生を決定づけたように思います。考えてみれば、偉人と呼ばれる人々にはほぼ例外なく苦難の時期が訪れます。しかし、みなそこでそれまで以上に学び続けるのです。

吉田松陰は鎖国時代に渡米を決意し、ペリーの軍艦に潜り込もうとした罪で野山獄に投獄。獄にいた一年二か月の間に六百冊もの書物を読破し、同時に囚人たちとともに『論語』や『孟子』を学びました。西郷隆盛もまた、島流しにあった沖永良部で、戸も壁もない寒風吹き荒む格子の中で数百冊に及ぶ書物を読み耽ったといいます。

高い志を立てること、そして不遇の時期にも学びをやめないこと。これが偉人への道であり、限りある人生を全うするために肝要なことと思います。

いまありがたいことに頼山陽に関する講演や展覧会を開催すると、若い人、それも多くの女性が足を運んでくださいます。頼山陽という偉人の存在を一人でも多くの日本人、それも若い人たちに知ってもらいたい。それが私の願いです。人生は「少年老い易く学成り難い」からこそ、頼山陽の人生から立志と学び続けることの大切さ、そして日本人として生まれた幸せと国への誇りを感じ取ってもらいたいと思います。

私の母は 94 歳で亡くなりました。5 年間入院をし亡くなる 7 日前に、孫(私の息子)にたどたどしい字で書いた色紙がございます。　**生きることは　学ぶこと　そして　それを社会に返すこと**

私は、生きることは、志をもって学ぶことが大事だと思います。自分の子供や孫に教えないといけません。日本の歴史は本当に素晴らしいものだという事を伝えていかなければいけません。それが私たちの使命と思います。私は現在 70 歳ですが、いくつになっても学び、自分のできることで社会にそれを返していかなければいけないという事を感じるこの頃です。桜の満開の時期に、私の大好きな頼山陽先生の事をお話しする機会を与えていただきまして有難うございました。皆様どうぞお元気で。